

h 2 5 . インターハイ総括      2 0 1 3 . 8 . 2 9

夏のインターハイご苦労様でした。  
今回、水球と飛び込みというマッチングで行った。

特に最終日、水球の閉会式では飛び込みは練習をひかえていたが、予定の12:40を過ぎても終わりそうにないので練習を再開した。13:00開始であったが召集完了をその時刻に充て試合前の練習時間を20分とった。(本来は30分とるところ)飛び込み役員の帰りのチケット時間などがあり遅れをなるべく出さないようにした。なお、選手・コーチへの連絡は予選が終了したあと、そのことの詳細を得て12:40分からの練習に踏み切った。また、水球の閉会式が10分遅れたことも付記しておく。いずれにせよ最終日は時間のやりくりを考える必要がある。

あとは、多少の問題はあったにせよ、大変素晴らしい大会になった。選手の演技はもとより運営もたいへん素晴らしかった。

地元九州の選手の頑張り全員決勝に残っている。

男子高の大塚千誠選手(浜松修学舎)は600点の大台に乗った。

男子飛び板の遠藤正人選手(利府)は助走でミスをして止まってしまって2点減点のハンデイを背負ったが最後まであきらめずに演技した。僅差で3位に食い込んだ。わずか0.65の差で・・・。

新人の活躍があった。男子の須山晴貴選手(松徳学院)である。板2位、高予選では3位につけていたが決勝では9位に甘んじた。

女子では高も板も結果からみれば榎本遼香選手(作新学院)の独壇場であった。後はだれが来るかまったくわからない状況であった。

高校生の課題としてあげるならば、助走の安定性に課題が見られる。

高さ、まっすぐに上から下りてくるハードルでないと板は踏めず、種目を飛ぶこと、板をしながらの飛びだしはできない。いい演技をすることができない。前に流したら板を押さえることができないが飛ぶのは飛べる。しかし、前逆宙返りは、前傾すれば膝抜けして前に飛んでしまう。前に流れないでハードルを高くするというのは前逆系統の助走を見るのが一番良い。